Osaka Shoin Women's University Repository

について、前頁のごとき統計を取つてみた。なお、各篇の字数分布表も作成してみたのであるが、その表示はここには略すこととして、康成の文長指数は年代によるはつきりとした変化は認められないといい得るようである。

三島由紀夫氏は、川端康成について述べたなかで、「川端さんが名文家であることは正に世評のとおりだが、川端さんがついに文体を持たぬ小説家であるというのは、私の意見である。なぜなら小説家における文体とは、世界解釈の意志であり、鍵なのである。混沌と不安に対処して、世界を整理し、区劃し、せまい造形の枠内へ持ち込んで来るためには、作家の道具とては文体しかない。（中略）ところで、川端さんの傑作のように、完璧であつて、しかも世界解釈の意志を完全に放棄した芸術作品とは、どういうものなのであるか？それは実に混沌をおそれない。不安をおそれない。……」（「永遠の旅人」）といつているが、康成の完璧ともいえる美しい文章の秘密は、以上の調査の結果にも、いささかのぞかれたであろうか。この小文は、初めにもしるしたように、波多野完治氏の文章心理学の方法を学び、康成の文章にかすかな照明を当ててみたものにすぎない。私の創見といえるほどのものは何もない、ささやかなこの調査が、康成の美しい文章の秘密を少しでも照らしておれば幸いである。

立原道造について

吉田玲子

短歌から詩歌へ周到な準備を行ないつつ転換していつた立原は、その後もあくことなく自分の〝詩〟を、その精神的発展の途上において自分自身の気持と重ね合わせることによつて追い求めた。淡々とした自己陶酔の歌を歌いたい為に。それでは立原のわずかなばかりの詩作期間―四年間―の間に自己陶酔の歌を歌うことが出来たであろうか。

ここに一冊の本が机上にある。その中に、いわゆる立原の世界が書きとめられている。

現代詩の世界にのこされたひとつのやさしい歌―本然的といつていいほどの青春の抒情を語るとすれば、それには

Osaka Shoin Women's University Repository

立原道造の詩こそ、いちばんふさわしいものである。（『現代詩の鑑賞』下巻伊藤信吉著・新潮社）

と。すなわち脆く美しいリリシズムが彼の詩風の一般的通念であり、私もまた否定はしない。しかし、立原の作品を続むたびにそれを否定はしないながらもわずかな疑問をいだく。そして、私の心の小さな疑問がやがで雨足の早い雲が広がるように、いつのまにか大きくふくらんでいるのに気がつき、それと同時に立原が詩を書きはじめてから生涯追い続けたもの、求めたものを得ることが出来たであろうかと、たたみかけるように思うことがしばしばである。何故なら、彼の作品のシンプルさに比べて彼の精神記録ともいうべき書簡やノート（日記）の不安定さゆえに。立原が詩に関して（結局、彼の人生は〝詩〟そのものであつたのだが）「僕が書きたくてたまらないのは、いちばん淡々とした自己陶酔の歌である。」（いろいろなこと　㈡）と自ら述べているけれでも、そうであるならば、彼があこがれ、望んだ自己陶酔の歌を歌うことが出来たか？といえば、かならずしもそうではない。いや、はつきりと否といえるのではなかろうか。生涯、それを追い求めはしたけれど。ここに、立原自身の不幸がある。それでは、何故あこがれ、望んだ自己陶酔の歌を、彼は歌うことが出来なかつたのか。私なりに少しこの問題について立ち入つてみたいと思うのである。

自意識――どんな人間でもまた誰でもが少なからず持つているもので立原とてむろん例外ではない。いや自意識過剰であり過ぎた程に。すでに十四歳の頃からはつきりとそれが認められる。

今日こうして先生に僕はお手紙を差し上げようとペンをとつていますが、これが先生に差し上げた学友諸君の手紙の殿（しんが）りをつとめて、最終の手紙だろうと思つています。他の諸君の様にきれいな字、美しい文さへ持つていればもつと早く書けたろうと思つて居りますが、下手なため遅れて誠に相済ませんでした。（昭和二年八月三十一日付橘宗利宛書簡　傍点引用者）

この夏休最終日に彼がなにげなく書いた書簡は、当然学校がはじまつてからしか相手の手元に屈かない。だのにあえて学友諸君の手紙のしんがりをつとめる為に手紙を書く、これは裏を返せばとりもなおさず立原の一種の自信であり、最後の手紙を自分がつとめるという一つの芝居でもある。この当時は彼自身も気がついていなかつたであろうがのちの立原の、少なからず物事を劇的に考える（のちの場合はメルヘン的といつた方がより適切であろう）一つの精神が詩作活動以前に芽をふきこの時期に育つていつたとみることが出来る。

……私小説を裸になつて書くことの困難さと同じ強さで、僕は自分の部屋に人を招待することに躊躇している僕を見つけます。だが――僕はその感傷をすてなければならない。

（昭和九年四月二十日付国友則房宛書簡）

Osaka Shoin Women's University Repository

これ程までに他人を自分の部屋に招くのを躊躇する立原、しかし、そのこと自体はある種の人間にはよくあることだが、そのあとすぐにそれを感傷だといつて捨てようとするところに、我々はただ単に感傷として受け取ることが出来ない複雑さをみるのだが——。ここにも彼の自意識が隠されてはいないか。また彼は大層甘いもの特に羊羹が大好物であつたがそれに反してすこしの酒も飲めなかつた。そのことについて、

飲酒のことは、ほかの道に行く人ならば、わるいことかも知れないが、文学などする若者には、そうしたことはひとつの美点かも知れないのだ。そうしたことにより、彼はきつといろいろな人生を知る。（中略）だから、それを行なうことの出来ない、文学の道をえらんだ若者は、許しがたい欠点を持つている。つまり、ひとつの人生を失つている。（中略）けれど、また考えなおすに、「花伝書」の序に大酒が禁じてある。これは文学ではない、芸術を志すものの道だつた。それならば、この道を行つて、芸術である文学を得るためには、酒をのまない僕こそすぐれた資質なのであつた。（昭和十年六月十日付生田勉宛書簡）

酒を飲めないのを「ひとつの人生を失つている」と嘆いているが、実際は心の底から嘆いてはいない。この嘆きを嘆きとしない立原——自意識いや自尊心ともいうべきものがこのように彼のすみずみまで行きわたつている。また、

皆がノートをとつているとき、ポカンとしているなんてそれがどんなに高貴な孤独にみちた快楽か。（昭和十年四月五日付柴岡亥佐雄宛書簡）

という言葉をはかせる。その場合、彼はむろんその瞬間の孤独を愛し、楽しんでいるのだが、その時の自分の姿をもう一人の立原がじつとみつめている。すなわち、もう一つの目を確かに彼は意識している。こうして自意識が大きく頭をもたげてくる程に、彼は自分自身を客観視していく。

僕は僕のやくざな性質のなかから、子供つぽさばかりを取り出して、それをぢつと眺めてくらした。（ノートⅢ）

僕は古い僕とたたかうだけで、それを敗かすことだけで、どんなに生き生きとしていられたか。（ノートⅢ）

という風に自らを自らの手で残酷に客観視するのである。これ程までに自分をみつめ傷めつけた立原ではあるが、結局つきるところは、彼が自分の「一生を芝居でありたい」（昭和十一年九月二十八日付杉浦明平宛書簡）と願つたことによつてなされたと思われる。しかし、一生を芝居でありたいという念願は念願として、

それをこのごろ軽蔑して切り殺そうとしている。（中略）そのことだけではない。相手にいつも芝居のすぢ書を要求している。それも新派悲劇ゆえ、人々みなそれを裏切る。が、いつでも芝居をたくらむどうにかしたい。

僕はたのごろレトリックなしになりたい。（昭和十一年九月二十八日付杉浦明平宛書簡）

Osaka Shoin Women's University Repository

彼の詩の魅力である柔軟なレトリックは、読者がその作品を読んでゆくうちに、意識されて書かれたレトリックの魅力に包まれてしまうか、あるいは嫌悪を感じるかどちらかなのだがそれをもきり殺そうとしている。他人が芝居的であるのを拒むために。こうして彼は他人に求めるのではなく、自分の生活のうちに、彼の身につけていた下町的雰囲気をより芝居的に、また西洋の中世へのあこがれがよりメルヘン的となつて彼の身辺をただよわせる。このことが次の言葉となつてあらわれる。

どこからも逃げもせず、どこへも逃げもせず、ただ自分の弱々しさに触れたとき、急にひろい美しい国がひらける。僕は、そこの青い額の王子となり、青い空をひねもすやさしい太陽と風の愛撫に身をまかせながら、ながめています。

（昭和十一年十二月二十四日付田中一三宛書簡）

こうして、自らのうちに自らの望みやあこがれをはぐくんでいく。――立原が心のふるさととして一生涯忘れることの出来ない追分村で得てそして失つた恋にしても、また東京での心のよりどころである古いランプのある屋根裏部屋の生活においても、また自分でデザインした六つもボタンのある背広と細いズボンに五尺八寸、十三貫の身を包んで雨にぬれた歩道を妖精のようにふわふわといまにも宙に舞うように歩いていたときにも……彼は心の遍歴をより美しい抒情で一ぱいにしながら歩み続けていく。

こうした自意識過剰で自分を客観視し、一生を芝居でありたいと願つた意識された生活のなかから、自己陶酔の歌が生まれることが出来たであろうか。たとえできたとしても意識された自己陶酔の歌であつたろう。それと、もう一つ彼が建築家としての道を歩んでいたこと、これは彼を全ての物事を論理的に組立て思考するようにしてしまつた。ここにもまた、彼が自己陶酔の歌を歌えずに至つた一要因が含まれている。立原がもし文科へ進んだら、先輩芥川龍之介や久保田万太郎を凌ぐことも決して夢ではないと私は信じていたが、彼自身は美術学校へ行きたがつた。（中略）しかし母堂のたつての言葉でその希望は棄て建築科に向つた。無論中学四年から一高、東大だつたが、私は立原としては一番損な道を択んだように思つて残念だつた。けれどもそれは私の杞憂で、建築科でも抜群の成績を示し、獲難い辰野賞とかを何んでも二回も取つたと聞く。（『立原道造全集』　月報2「立原の思い出」橘宗利　傍点引用者）

このように彼のありあまる才能がなにをしてもこなせた――こなせるというより、そのとつひとつがぬきんでてよかつたのだが――このことが結果的にあまりかんばしくなかつたようだ。これは彼自身も気がついていたとみえて、僕自身がバラバラだということに気づく。方々に僕の個性がちぎれて飛んでしまつている。先ずこれを拾い集めて行かなくては、僕は、いつまでもふらふらしているにちがい

Osaka Shoin Women's University Repository

ない。（手帖）

と述べている。すなわち、多くの豊かな才能絵画、音楽、建築またはその他の個性が彼の中において一つにまとまっているようで、いなかつたのである。しかしその半面、これらの才能が彼の詩を、絵画的かつ音楽的な雰囲気で満たすと共に、その構成力が一つの立派な詩風を樹立したことも確かである。けれども彼の望んだ自己陶酔の歌を歌うには、その才能をあまりにも各方面からいじくりまわし過ぎて、自分自身が心から酔う歌――自己陶酔の歌を歌えなかつたのではないか。しかし、彼はそれを追い求めた。

耐へねばならない、一切の拒絶は美しいと、この嵐のなかに立ちつくすばかりです。明日は平和なしづかな一日をと、祈つています。なぜ平和を祈るのか、なぜ復讐を祈らないのか、こんなところが僕の分れ目だとおもいます。意気地ないとおもいながらも、僕はやつぱりしづかな血が欲しい。（昭和十一年十二月二十九日付杉浦明平宛書簡）

立原はここにおいて自分の性質をうまくつかんで表現している。しかし、思うところに人はあまりにも自分自身を客観視すると、たとえよい考えが浮かんでも自由に身動きが取れなくなるのではないか。なにはともあれ、彼が復讐を祈らない――ここにも自己陶酔の歌を歌えない要因がある。何故なら、仮りにそれを企て功を奏したならば、そこで一時的にでも陶酔の歌が出来るであろう。しかし立原は、そんなわきたつ血よりも静かな血が欲しいと思い、静かな血を得た時にはきつと後悔の念がさきにたつであろう。この後悔の念を抱くところが、彼の分かれ道であり、多くの努力にもかかわらず、自己陶酔の歌から遠ざける要因でもあろう。

詩人は神を忘れたのであつた。表現はただ表現にとどまつた。このとき、詩人は、表現されるべきものが詩に欠けているのに気づいた。それは自己陶酔から醒めたのである。がすでに神はとおかつた。（昭和十二年八月二十六日付生田勉宛書簡）

ここにおいて、彼は以前は自己陶酔の歌を歌つていたと思つているようだが、私はそうではないと思う。ただ単に自己陶酔という名に彼が酔つていたのではないか、ここに彼の一つの生の精神がみられる。こんな中から、

きれいごとに耐へる才能などというのは決してほんとうのものではないので、逞しい生活への意欲に耐へる才能だけが才能といわれるべきだと思つた。だが、才能のあるなしに拘らず、詩を思う心ははげしいのだ。（昭和十二年八月二十六日付生田勉宛書簡）

という詩に対する乱れた心を、我々は聞かされる。ここにあらわれた必死な言葉のなんと傷々しいことか。こうして晩年に至つて次のように告白する。

けふ僕は真に詩に値するものがただ美しい魂の告白にあらねばならないと知る。同時にいかなる意味でもひとつの発

Osaka Shoin Women's University Repository

展として、人間の告白はつひに詩であらねばならない。「われら、青きに挨拶しつつ青空となる。」ここに一切がある。そして「危険ある所、救う者また生育する。」と。これがけう僕の詩を書き得る唯一の地盤だ。あまりにもひとつの態度ではなかろうか、しかしこれは！そして僕は美と美への意志と美の陶酔とをどこになげうつたのか！「詩とは何？」とはだれも問わない。詩はつねにひとつの魂が「どこへ？」と苦しみを以つて問いつづけるところにある。（昭和十三年一月下旬付杉浦明平宛書簡）

僕の今までの歌は何としやれていて美しいいつわりの花だつたかと、ひとのもののようにそのまえに僕は立つています。しかし、あれには僕が大切な僕がいない。今の僕はもつとちがつた歌をうたいたいとおもいます。（昭和十三年九月二十八日付深沢紅子宛書簡）

こうして立原は自己陶酔の歌を歌いたいと願いながら、結果として一篇のそんな詩をも残さず、新たな心の歌を求めつつ、はかなく散つていつた、と私は思うのである。

受贈図書（その一）

（昭和三七年一一月～同三八年九月）

跡見学園国語科紀要　第一一号
帯広大谷短期大学紀要　第二号
香椎潟（福岡女子大学国文学会）　第八号
かりばね（信州大学文理学部信大文学会）　第二号
学苑（昭和三七年一一月～同三八年九月号）
学術研究（早稲田大学教育学部）　第一一号
学大国文（大阪学芸大学）　第六号
近世文芸　第八号
金城学院大学論集　第七号
研究年報（帝塚山学院短期大学）　第一〇号
甲南国文　第一〇号
国語学研究（東北大学文学部「国語学研究」刊行会）　第三号
国語国文学（名古屋大学国語国文学会）　第一二号
国語国文学報（愛知学芸大学国語国文学会）第一六・一七集
国語国文研究（北海道大学国文学会）　第二三・二四・二五・二六号
国文学（関西大学国文学会）第三四号
国文学研究（早稲田大学国文学会）　第二七輯
国文学攻（広島大学国語国文学会）　第二九・三〇・三一号
語文研究（九州大学文学部語文編集部）　第一五号
成城文芸　第三一・三二・三三号
新国語（国学院大学院友振興学術会）　第一号
上代文学（桜楓社出版上代文学会）　三七年第二号

（70頁へ続く）